(一)　第888号　【昭和27年9月25日 第三種郵便物認可】　THE MIIKE　(毎月1日、16日発行)　昭和45年3月16日(月)

三池闘争

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話 ③3033番 ③3034番
編集兼発行人 澁田紀生
年間600円 送料共

編集部より

本紙は久保清忌十周年にちなんだ記事を掲げ、六〇年闘争をしのびましたが、組合員・主婦の皆さんも、どしどし忘れられぬ思い出を寄せて下さい。そして力強く歩きましょう。

家族共々参加を

三・二九決起集会

きたる二十九日午前十時から開催される「故久保清忌一〇周年、安保廃棄・沖縄奪還、春闘大決起集会」及び二十七日午後五時三十分から開かれる荒尾前夜集会（同市公会堂）、二十八日同時刻から開かれる大牟田前夜集会（同市労働会館）には、家族といっしょに積極的に参加しましょう！

久保さんの血できたえられた われわれの団結の力

福社一分会(四山)の皆さんの話から

昭和三十五年三月二十九日、三池闘争の最中に会社、暴力団の手によって同志久保清さんが刺殺されて十年がたった。きたる三月二十九日には、総評、炭労、三池労組共催による、「故久保清氏十周忌、安保破棄、沖縄奪還、春闘大決起集会」がひらかれる。

あの歴史的な三池闘争と、その後の不屈な抵抗闘争を闘い抜いたすべての三池労組員、家族にとって、久保さんの死は永久に忘れることができないものであり、われわれの闘いの出発点でもある。久保さんと同じ地域に住み、闘い、そしていまも闘いつづけている四山指導部福社一分会のみなさんに「この十年」を語り合ってもらった。話し合ってもらったのは藤末成助さん（地域分会長、四山開発仕繰工、四十三才）奥さんのます子さん（四十五才）、野口司さん（港務踏切手、四十九才）、影山猛さん（昭和四十三年に停年退職、五十七才）奥さんの沢子さん（四十七才）酒本忠義さん（四山内電工、三十才）。なお、文章は編集部でまとめた。

働く者の涙と怒りあふれた組合葬

分裂策動の中心だった福社一分会

三池闘争に突入して、第二組合の結成へむけて批判勢力がうごきはじめたころから、福社一分会は四山でのその中心として活発だった。以前からあったボスグループを中心に他分会からもコツコツと策動に入っていたらしい。

毎朝の団結集会でも、その人たちはハチマキをしめずに首にかけ、みんなの列に入らずに後の方に固まってウデ組みをしていた。分会役員の話しにはヤジをとばし、論争になると人垣をかきわけて前に出てきて喰ってかかっていた。だから第二組合の直接の母体だった配転同志会も一番早くできたし、地域の役員の何人かも公然とそれに入っていたので、百名に近い分会員も、隣りがいくならウチも、とか、あの人がいくなら行かないわけにも……とかいう程度だった。だから久保さんが殺されるころには、福社一分会で三池労組員は六十名くらいになっていた。

一挙にふき出した怒り

二十九日、その日……

無期限スト突入からおよそ二カ月、三月十七日には第二組合の結成、三月十九日には職組の炭労脱退、三月二十七日には炭労が一挙に局面打開をはかるために指令した二〇三号指令が三鉱連から返上され、炭労は戦術を転換し中労委にあっせんを申請し、三池闘争の收拾をはかろうとした。

これをみた会社側は三池労組の抵抗力を粉砕する好機とばかりに第二組合員にピケ破りを行なわせ強行就労をはかり（三月二十八日の三川鉱事件、四山第二人工島事件）同時に恥しらずにも九州一円の暴力団を金で雇い入れ、三池労組のピケ隊におどしをかけはじめた。

二十九日には四山でも組合支部に黒シャツ隊（第二組合の行動隊）が棒をもって押しかけたり、午前中には売店前でヤクザがナタをもって暴れたりしていたので、「これは何かある」という予感がしたし、四山鉱正門、南門、北門のピケ隊も、誰いうとなく手に手に身を守る棒切れなどを持ったりしていた。

藤末さん、影山さんらがいた南門のピケ隊の所へ、こん棒、日本刀、アイクチなどで武装した約百五十名の暴力団がトラックや乗用車でのりつけたのは午後五時ごろだった。その直前に警官がきて、「自分たちが責任をもつから棒をすてろ」というので、みんなは柵の向うやムシロの下になおし、素手でスクラムを組んでいた。

バラバラと車から降りたヤクザたちは第一裝の背広をきて、その内ポケットに右手を入れてドスの柄をにぎり「お前らは相手になるのか」といいながら、ピケ隊の前を行ったりきたりしはじめた。何をされるかとおそろしかったが、ピケ隊はしっかりとスクラムを組み、整然と「炭掘る仲間」をうたって応えた。

しばらくしてヤクザたちは正門の方へ出発したが、やがて正門からバンバンと花火（緊急合図）が上がった。そのすぐあとに正門の方から猛スピードで乗用車が一台降りてきた。運転台の横にはシャツだけの男が一人、腕で胸をかくすようにして乗っていた。

しばらくして、正門の方から女の人がころげるように走ってきて「久保さんが殺された！」とさけんだ。南門のピケ隊はこの声を聞くと、一も二もなくイキリ立ち、いったんは捨てた棒をひろって一斉に正門の方へ走り出したが、途中はもう警官の厚い壁にさえぎられ、会社と暴力団、警察が一体となって演出されたこの白昼の殺人現場をつつみかくしていた。

胸の下に穴がポッカリと

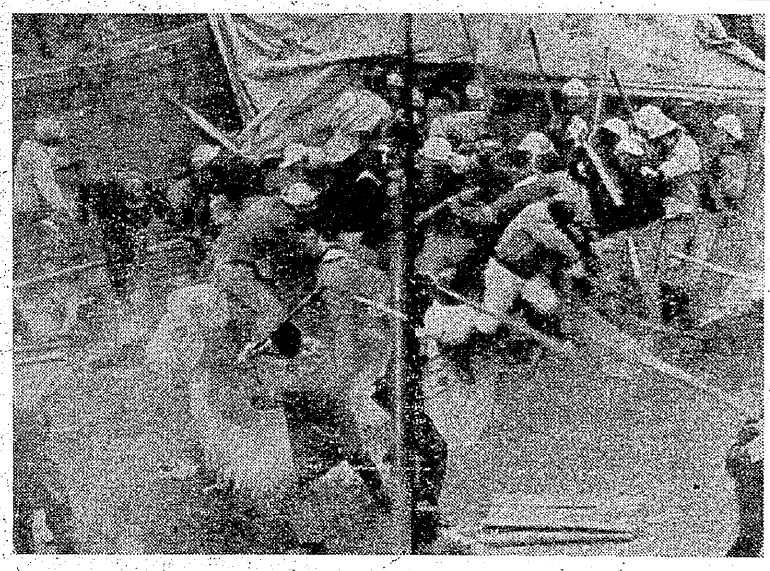
警官から一人ひとり身体検査をされ、棒をとりあげられ、人垣の間を一人ひとり通って四山分院にたどりついたときは、久保さんはもうタンカにのせられて分院の前までつれてこられていた。影山さんはソッとかけられた毛布をはぐってみたら、久保さんの胸の下にポッカリとアイクチで一突きされた穴があいていた。「助かればいいが……」と思ったが、もうほとんど即死にちかかった。

デモ、抗議が突発

「久保さんが殺された」という声は、またたく間に四山社宅にひろがった。福社一分会では主婦たちはもう暗くなった社宅の中にみんな集まって、ワンワン泣きだした。みんなの胸の中には、あまりにも明らかな虐殺へのくやしさがいっぱいだった。

だれも指示しないのに、五、六人ずつの主婦が一組になって、第二組合員の家を一軒一軒まわって「あんたたちが第二組合をつくったので、こんなにして久保さんが殺された。どうか思い直して下さい」といって回りはじめた。

社宅の中に帰ってきた藤末さんは、五、六人の主婦が一軒ののき先に立って、電灯を消して暗くなった家に向って泣きながら一生懸命呼びかけているのをみた。



暴力団の香月は久保さんめがけて……

ハラの底から"許せない"

はじめて感じた連帯の力強さ

まじめだった久保さん

かって久保さんが地域分会の班長をしているとき、一緒に児童対策を受け持った藤末さんは、おとなしくて目立たないが、それでも本当にまじめで責任感のつよい人柄がいまでも強く印象にのこっている。

久保さんの社宅の周囲はみんな第二組合へ脱落していったが、久保さんだけはずいぶん迷いながらも断わりつづけていた。

それまではまだいろんな弱さをもった団結だったのが、あの久保さんが、あんなやり方で殺されてから、初めてみんなハラの底から「許せない！」という気持になっていった。本当に目の色が変り、闘争に本腰が入ったのはそれからだった。

脱落もピタリとまる

久保さんが殺された日のことだった。分会の役員をしていた影山さんを、第二組合の中心人物だったSさんがモノかげにそっと呼んで、「久保さんの葬式はあんたたちで出してくれるかい？」ときいたことがあった。影山さんはトッサに、「うん、当然だよ」と答えて通りすぎたが、もし影山さんが「こっちは断わるよ」とでもいっておれば、Sさんの気性なら第二組合で用意万端ととのえて第二組合員に仕立て上げて葬式を出したにちがいない。そうなったとしたら局面はずいぶん変ったろうとの影山さんの秘められたエピソードもある。

それほど第二組合への分裂策動はバクゼンと侵入してきていたといえる。一人ひとりがはっきりしていなかった。

しかしそれ以来三池労組員と家族は「カチッ」と固まってきた。

福社一分会でも、もう脱落する者はいなくなった。そして四月の炭労大会もあの不当な中山斡旋案を拒否し、闘うことを決定した。

全体が一家族のように

それ以来、組合員はサラシの胴まき、竹筒の水筒、短い旗ざおという「ホッパースタイル」が出来あがっていったし、闘いの決意もますます固まった。

主婦は夜寝るときにもハチマキをはずさず、昼はタキ出し、集会、ピケの激励などに走りまわり、洗たく、掃除などは真夜中だった。二階に泊めていたオルグさんが「奥さんたちは感心ですね、いつ洗たくしよるとですか」とたずねるくらい引き締めていった。

夜も玄関はしめきることはなく、いつでも連絡が来れるように開けていたし、夜、お父さんたちが緊急動員で飛び出したあとは、すぐ集ってタキ出しをした。後にのこった女と子ども、病人たちはみんな闘争本部に集まり火をたいてすごすという夜がいく晩もつづいた。

なによりも苦しかったのは一万円生活だったが、子どもたちも誰も不服もいわずよく頑張った。いまでも主婦会で生活が苦しい話しが出ると、「あの時のことを思うと何でもできるね」と話し合うことがある。

それまでは警察は護ってくれるもの、とばかり思っていたのが、彼らの本質がハッキリとわかった。いよいよハラをすえた労働者の前では、もう身を護るのは警察や暴力団の方だった。主婦会もよく集団で社宅の中に駐留していた警官隊に抗議に行くようになったし、「番犬！」「税金ドロボウ」という痛烈なヤジがポンポンと飛び出すようになった。

【二面へつづく】